

関大本鷺畔翁狂言《寝代り》復曲

関屋俊彦

はじめに

関西大学総合図書館には鷺畔翁の狂言台本十冊（一冊二十曲、計二百曲の書写）が残っている。奥書を見ると大正七年に鷺流家元二十一世仁右衛門畔翁が七十七歳の時に書き写したということがわかる。大変読みにくい字だが、明らかに「廿一世」と記すのは「廿世」の誤記である。それにしても当時としては高年齢の筆になっているということに、まず驚かされる。しかし、どの能楽諸家の系譜を調べてみても「鷺流家元」とは記されていない。すなわち畔翁は、歌舞伎に手を染めた等といった理由から能楽の世界からは家元としては認められていないのである。法政大学能楽研究所には、さらに六年前の大正元年七十一歳の時にもまったく同じ装丁で書かれたものが残っている。鷺流には近世を通じて宗家仁右衛門家と分家伝右衛門家とがあつ

たのだが、仁右衛門家十九世の権之丞は明治二十八年になくなり廃絶、伝右衛門家もその前の明治十五年に十二世浩次郎が割腹自殺を遂げ廃絶している。細かい字に七十を越えた老人がどのような思いで執筆していたのか大変気になってしまった。関大本は、まさに畔翁最晩年の台本である。貴重書でもなんでもないのが余計痛ましく感じられ、なんとかしたいとの思いが強まっていた。各種講演や求められるままに書いた狂言関係では短く記したことも再々あつたが、気にとめられることもなく、また、それ以上調べることもなく終わっていた。しかるに『狂言画写の世界』（平成十七年・和泉書院）の序文を中野真作氏に依頼され、それがきっかけで奥様の慎子氏との共著者である大蔵流狂言方安東伸元氏に近づく機会を得た。氏が関大のすぐ近く千里山にお住まいであつたということもその時知つたのである。それから関大図書館をご案内し、畔翁本を見ていただき、

私の思いを伝えたのである。氏の反応は早く、一緒に復曲しましょうということになった。

数曲を選び、安東氏に鷺流らしい曲、舞台となる千里中央のA & Hホールの条件等を考慮に入れてもらって、《寝代り》

(以下、特記する場合を除いて表記のようにした)を決定し、平成十九年二月二十四日に演じられた。その時の台本の元になったものを「台本翻刻」として記したので参照されたい。当日の台本も記すべきかも知れないが、畔翁の台本を翻刻するのは従来なかったことであり、枚数の関係もあつて省略した。シテ出家は安東氏で、私自身も太郎冠者役で出演することとなった。

さらに太郎の女主人役に氏の高弟であり、実は私の昔のゼミ生でもあつた山田師久こと茂氏がお相手をしてくれることとなった。「鷺流狂言について」の講話も行うといういわば二足の草鞋がたつたのか、久しぶりの舞台でセリフを度忘れしてしまい観客と顔を見合わせるといふ失敗もあつたが、長年の念願がかない、鷺流また鷺畔翁を考え直すによい機会を与えてもらったことになる。とりあえず当日配布の『大和座通信』(大和座狂言事務局)八十八号に「鷺畔翁本《寝代》」と題して短文を書かせてもらっているが、講話で話したことはそれ以上であり、全貌を明らかにすることは無理にしてもどこかでまとめて

おかなくてはならないと考えていたところ、今回の機会がめぐってきた次第である。関大蔵鷺畔翁本自体もきちんと紹介されたことはないので、この際、紹介しておきたい。

一、関西大学図書館所蔵鷺畔翁狂言台本について

狂言台本の所蔵状況を調べるには、以前は池田廣司氏の『狂言台本の発達に關しての書誌的研究』(昭和四十二年・風間書房)を使っていたが、今は橋本朝生氏『中世史劇としての狂言』(平成九年・若草書房)が詳細なので重宝している。たゞ同書には関大本鷺畔翁狂言台本は取り上げられていない。関大本の書誌は次の通りである。

写本十冊。現在は帙入り、三帙。横本133×193。白地横黄線模様覆表紙。左肩貼題簽。楮紙。各冊に目録あり。各冊一丁表遊紙に朱角印「鷺流家元」、最終丁裏に朱角印「鷺流廿一世」。以下、曲名は内題による。()に通行の曲名。連番・曲名の下「習」は朱書。なお、能楽研究所の水野文庫本と比べても「小舞」の部がない。恐らく元は「小舞」の部が一冊あつたであらう。

「第一冊」題簽「翁附 脇狂言 第壹」。全102丁。

壹 末廣かり 貳 張蛸 三 目近込(籠)骨 四 三本ノ柱

五 麻生 六 福の神 七 大黒連歌 八 蛭子大黒

九 蛭比須毘沙門 拾 連歌毘沙門 拾壹 氏結

拾貳 相合烏帽子 拾三 昆布柿 拾四 雁厂金 拾五 松樸

拾六 勝栗 拾七 三人夫 拾八 餅酒 拾九 佐渡狐

貳拾 筑紫の奥

〔第二冊〕題簽「智事並盜人事 第貳」。全97丁。

壹 鷄聾 貳 懷中聾 三 引敷聾 四 音曲聾 五 包丁聾

六 賽ノ目聾 七 斯好聾(角水) 八 水掛聾 九 船渡聾

拾 泣聾 拾壹 岡太夫 拾貳 八幡の前 拾三 二人袴

拾四 盆山盜人 拾五 花盜人 拾六 子盜人 拾七 瓜盜人

拾八 雁盜人 拾九 連歌盜人 貳拾 引縊り(引括)

〔第三冊〕題簽「出家事 第參」。全91丁。

壹 蛸 貳 榮螺 三 金津地藏 四 地藏舞 五 骨皮

六 不腹立 七 薩摩守 八 名取川 九 祐善 拾 小傘

拾壹 呂連 拾貳 悪坊 拾三 悪太郎 拾四 宗論

拾五 無布施経 拾六 水汲新発知 拾七 花折新発知

拾八 通円 拾九 楽阿弥 貳拾 泣尼

〔第四冊〕題簽「脇狂言 大名事 第四」。全109丁。

壹 鍋八撥 貳 牛馬 三 寶の槌 四 隠れ笠 五 鎧

六 文蔵 七 二千石 八 名取川 九 早漆 拾 煎じ物

拾一 粟田口 拾貳 韃嶺 拾三 入間川 拾四 秀句傘

拾五 今參 拾六 文角力 拾七 鼻取角力 拾八 蚊角力

拾九 萩大名 貳拾 二人大名

〔第五冊〕題簽「鬼事 座頭事 第五」。全95丁。最終丁に

〔七十七齡書 鷲仁右衛門畔翁 「鷲流廿一世」朱角印。

壹 朝比奈 貳 餌差十王 三 八尾 四 半錢 五 鬼の槌

六 節分 七 寶の瘤取 八 鬼の継子 九 首引 拾 神鳴

拾一 鬪罪人 拾貳 伯母ケ酒 拾三 清水 拾四 伯養

拾五 井礪 拾六 不聞座頭 拾七 川上座頭

拾八 花見座頭 拾九 茶軒座頭 貳拾 月見座頭

〔第六冊〕題簽「山伏事 人數物 第六」。全95丁。

壹 蟹山伏 貳 柿山伏 三 衾宜山伏 四 犬山伏

五 苞山伏 六 梟山伏 七 腰折 八 人狄杭狄

九 鐘の音 拾 花争 拾一 伊文字 拾貳 止動方角

拾三 素襖落 拾四 空腕 拾五 唐人子寶 拾六 仁王

拾七 米市 拾八 合柿 拾九 歌仙 貳拾 八句連歌

〔第七冊〕題簽「女事 第七」。全102丁。

壹 墨塗 貳 契木 三 箕被 四 吃り 五 鎌腹

六 法師ケ母 七 若菜 八 因幡堂 九 内沙汰

拾 鈍太郎 拾一 石神 拾貳 髭櫓 拾三 釣針

拾四 若市 拾五 塗師 拾六 河原太郎 拾七 鏡男

拾八 業平餅 拾九 金岡留 貳拾 庵の梅留

〔第八冊〕題簽「雑之部 第八」。全84丁。

壹 土筆 貳 飛越 三 舎弟 四 船ふな 五 口真似

六 咲花 七 雁磔 八 附子 九 昆布壳 拾 鞍馬參

拾一 千鳥 拾貳 酢辛 拾三 文山達(立) 拾四 繩なひ

拾五 寝音曲 拾六 物真似 拾七 富士松 拾八 呼声

拾九 惣八 貳拾 膏藥煉

〔第九冊〕題簽「雑之部 第九」。全87丁。

壹 栗焼 貳 いくゐ 三 心奪 四 太刀奪 五 抜殻

六 磁石 七 雁磔 八 大般若 九 佛師 拾 三人支離

拾一 棒縛 拾貳 文荷 拾三 鶏流 拾四 狐塚

拾五 いろは 拾六 しびり 拾七 輝

拾九(八の誤り) 長光 拾九 茶壺 貳拾 鳴子

〔第十冊〕題簽「習事 書上外之部 貳拾」。全102丁。最終丁

「大正七戊午年 廿一世 七十七歳 鷲仁右衛門 朱角印」鷲

流廿一世」鷲流家元」

壹 西翁(財宝) 貳 菊水祖父 三 武悪 四 鱸包丁

五 木六駄 六 鬼争 七 枕物狂 八 比丘貞 九 鷲

十 老武者 十一 唐角力 十二 兎流鎗馬

十三 成頼(政頼) 十四 人馬 十五 お冷し 十六 横座

拾七 禁野 十八 寝代 十九 胸突 二十 鹿ぞ啼

《寝代り》の台本は『中世史劇としての狂言』によれば、大

藏流では前期の虎明本以外なく、ほかはすべて鷲流である。個

人藏のものは原則取られなかつたようであるが、『狂言辞典

事項編』(昭和五十一年・東京堂)では「寝代」の項目に「和

泉流の三宅派番外曲は、江戸中期に加賀藩主前田重教の命によつ

て作られたものと伝えるが、野村万藏家本には「安永七年(一

七七八)三月七日、中村万右衛門様御取次にて御書物被渡写」

とあり、筋立てからして鷲流の曲を改作したものらしい」とあ

る。関大本では太郎冠者が坊主に最後は頼の鳴き声を要求する

のが眼目なのであるが、万藏家本では「タコ〜」で終わつて

いるようだ。今は『狂言辞典 事項編』の記述に従う。

次に橋本氏の示された《寝替》の鷲流台本を列挙する。数字

は橋本氏作成のものによる。

2 享保保教本 7 文化小杉本 11 遺形書 12 常磐松文庫五番綴

本 13 常磐松文庫抜書本 22 賢茂小杉本 39 野原弥七郎本 41

鷲畔翁型付本 42 鷲畔翁五番綴本 43 鷲畔翁一番綴本 51

佐渡安藤家本 56 山口本 57 山口河野本

42 鷺畔翁五番綴本には未記載であり、43 鷺畔翁一番綴本は畔翁自筆ではない。

41 鷺畔翁型付本は、関大本と同装丁である。曲順等に相違はあるが所収曲は同じである。関大本にはない「囃子附 全」があるのであるが、その奥書には「大正元子年十一月吉辰認之水野氏事矢田次郎へ譲る 家元鷺家廿世仁右衛門畔翁（朱角印）」とある。「鷺流家元」の印はまだないが、矢田次郎へ相伝したものであることがわかる。「十八 寝代り」とあり、後半の物真似は《盆山》と同断としているが、当該の《盆山盗人》では、犬・猿・鯛の真似の順であって、まだ鰻の発想はない。7文化小杉本（田口和夫氏御教示）と11遺形書すなわち『鷺流狂言型附遺形書』（法政大学能楽研究所）に「かわおそく」とある。鰻の発想はこれらを参照した可能性が高い。

二、鷺畔翁のこと

狂言の流派には現在では大蔵流と和泉流とがある。鷺流は伝承では室町時代の路阿弥だといわれているが、まだ伝説の域を脱していない。その中で有名なのは十世と伝える鷺仁右衛門宗玄で徳川家康に見出され、観世流の座付になった。座付という

のは狂言役者が能役者と行動を共にする訳で、その点、大蔵流が当初は金春流一辺倒だったものが、のちにはどの流儀とも一緒に公演していった融通性を持っていたのに対して、鷺流の方は明治維新を迎えてもかたくなであった。小林貞氏も『狂言史研究』（昭和四十九年・わんや書店）「鷺流滅亡の一因」の中で、一、家元権之丞の奇矯な性格が流儀をまとめられず、同流狂言師も吾妻能狂言に参加し、歌舞伎界へ接近して、新路線に乗り損ねた。一、比較的新しい流儀で観世座付きで、宗家消長と関係なく存続しうる別派を擁する流儀の幅広さと根強さを持っていなかった、とされる。

鷺畔翁その人については小林貞氏の先の御論考と、それを踏まえられた『狂言辞典 事項編』に「さぎばんおう 鷺畔翁」の項目があるが、昭和四十七年に法政大学能楽研究所に寄贈された水野文庫本でも追うことができる。目録は古川久氏「鷺流狂言水野文庫目録」（『能楽研究』第一号・昭和四十九年）で見ることができる。今、ここでは本論に直接かわることを記しながら新たな問題点を指摘しておきたい。

鷺畔翁は、天保十三（一八四二）年の生まれ。国立公文書館蔵『猿楽者分限短冊』（拙著『狂言史の基礎的研究』和泉書院所収）の「矢田半之助」は田口和夫氏が取り上げてくださった

〔能・狂言研究〕三弥井書店)が畔翁のことである。「鷲猪右衛門権之丞弟子、養祖父源八郎、養父亥之吉、実父松平修理太夫家来、鷲健次郎次男」とある。実際には実父矢田亥之吉・養父鷲健次郎であったであろう。明治維新は、世の価値観を一変させた訳だが、畔翁も翻弄されたひとりである。式楽と呼ばれ、幕府や有力大名から給料をもらえなくなった能役者・狂言役者はたちまち生活に困った。吾妻能狂言ともいわれる三味線を使った大衆芸能に走った者が現れたのもこのころのことである。畔翁も歌舞伎界に入り竹柴蝶三を名乗り座付作者となっていた。狂言の芸を歌舞伎役者に教えたのである。今では、梨園とか言われて歌舞伎役者の方が余程実入りがいいのだが、当時は、歌舞伎に接するとはとんでもないことだったのである。しかし、畔翁に教わった面々は今から考えると錚々たるメンバリーであった。守田勘弥・岡村紫紅・六世尾上菊五郎・七世坂東三津五郎等々。

歌舞伎とのかかわりで小林氏は『観世』昭和十六年六月号の「河竹繁俊「鷲畔翁のこと」を紹介されているのだが、簡略に引用されている『歌舞伎』(大正四年一月号)の前文は「左の一文は、今は能狂言の舞台に通れてひたすらに足拍子の間のみに心費せど、同じく黙阿弥門下の一員なる竹柴蝶三氏が、今度の

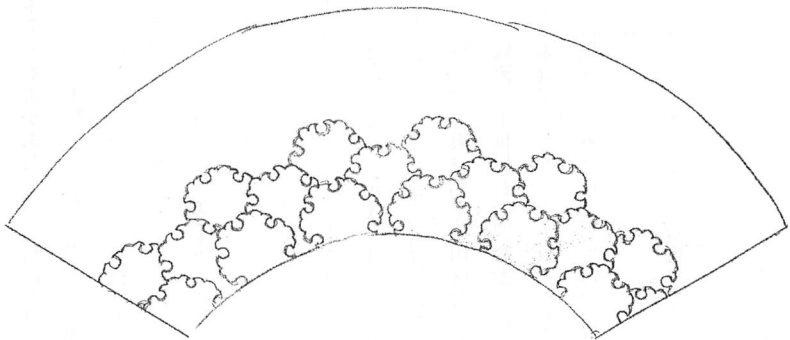
企を聞きて寄せられたればこゝに加へしなり。河竹生記」とあつて「七十四翁 鷲畔翁 生きて居るばかりそ冬の墓」の追善句に結ばれるのである。小林氏が「三世河竹新七の手について、竹柴蝶三という名も新七から与えられ」とされるよりは、「河竹黙阿弥門下」で、狂言の世界に戻ったという指摘の方がよりはつきりするのではなからうか。河竹繁俊著『増補改訂河竹黙阿弥』(春陽堂)は大正六年の発行であるが、「遺族及門業」には「故人の部」「今人の部」に門人の名前が列挙されている。つまり「今人の部」に「竹柴蝶三」の名が見られるのである。

大正九年三月号の『謡曲界』のインタビュ記事「名家訪問記」には、倅矢田次郎こと養子の水野清太郎のことが書かれている。彼には期待をかけていた訳で、水野文庫の免状では既に明治四十五年に「大習三番叟並二千歳」を鷲畔翁義道名で伝授し、大正五年には一子相伝「座禪(筆者注《花子》のこと)」を伝授している。ちなみに免状から弟子にはほかに中村秋湖・中村伊之吉こと中村三郎もいたことがわかる。養女もいて仁右衛門家のあとは自分が継ぐと、『謡曲界』の記事の時はまさに意気軒昂だったと読むべきであろう。ところが、インタビュを受けたすぐ後その跡取りは三十五歳でなくなってしまった。宮崎紋子氏「観世座付鷲流狂言の興亡」(『観世』昭和四十六年

十一月号)に「畔翁は、鷺流の伝書と名跡を、清太郎の弟修三氏(昭和三十四年没)に委託し(中略)いかに清太郎に対する期待が大きかったかを示す」と書かれている。まさに悲劇である。

柳沢澄氏の「鷺流のあと」(『観世』昭和十五年七月号)で墓は東京本郷の昌清寺にあることがわかっている。過去帳に「(大正十一年)十一月四日 冬映庵鷺畔翁雪飛居士 高橋ふさ夫 矢田蝶三号雪飛 八十一才」とある由、私も住職夫人から示されたメモで確認した。墓石は合祀塔の中にあるようである。

なお、今回、能・狂言の各流儀の扇には定まる絵柄があるが、鷺流ではどうなっていたのだろうかということが気になり、調べてみた。京都の十松屋福井扇舗主人の福井芳秀氏によれば定式扇は「雪輪文様」であると御教示いただけただけ報告しておきたい(別図参照)。ちなみに水野文庫に「鷺流扇面書付」があり、それには《寝代り》の登場人物でいえば「僧 銀地 白骨、太郎冠者 銀地藍絵 亀甲綴シ 白骨、女物 銀地 白入(赤色入) 白骨」となっている。女は未亡人という設定なので色入ではあるまい。



さて、この《寝代り》であるが、大藏流では通称「虎明本」

〔古本能狂言集〕等に所収〕と呼ばれる徳川三代につかえた大藏虎明が書写した台本の「萬集類」に「寝替」として記載されている。驚流では「保教本」といわれる伝右衛門家三世の保教が書写したものが、やはり「寝替」として天理図書館に残っている。「虎明本」「保教本」とも当日配布されたチラシの前段落に記されたように「檀家の後家に懸想して夜這いに及ぶ」けしからぬ坊主の話がメインとなっている。ありがたいお経の長い唱えごとがあるのだが、それすら口説きの文句となっている。しかるに昭和六十二年九月二十五日に住持茂山千之丞・新発意あきら・後家千五郎氏の出演、堂本正樹演出補綴で国立能楽堂で演じられている。『天和座通信』に書いた時は間に合わなかったが、その後、国立能楽堂のビデオで確認することができた。従来の狂言の感覚でいえば相当際どい演出であったといわざるを得ない。その時の『国立能楽堂』の冊子には、故北川忠彦氏も原稿を寄せていらっしやる。少し略しながら引用すると、「虎明本で萬集類という雑記にしたのは、露骨な表現を虎明が

嫌って、正規の台本から除いた」とか「驚仁右衛門派のものでは、文化小杉本や遺形書があるが、これはキリに盆山の趣向が加わるのが特徴で」いずれにしても「事実上廃曲に近かったが、昭和五十八年九月に京都の花形狂言会で復活上演された」とある。私なりに付け加えると、虎明の「萬集類」には、もともと驚流というより驚流以前の長命猿楽で演じられていたものが書かれていたのではなからうかと思っている。それを流儀の元だから外す訳にもいかなかったのではと想像もしている。

《寝代り》は通常「出家物」に分類される。たとえば一枚刷りの「驚流狂言一覧表」では「寝代」は「出家事」「四番目物」「季ナシ」に分類されている。分類の方法が独自であるのだが、この「驚流狂言一覧」は「東京都千代田区神田多町二ノ八 水野堯雪」発行で「驚流二十世仁右衛門咩翁」の監修になるものである。発行年は未詳であるが「二十世」としてある。住所については、それに先立つ水野文庫「名寄」には「浅草馬道町六丁目七番地」とある。

ところで『狂言辞典 事項編』が指摘するように「破戒僧の実態を具体的に扱う」曲は珍しいことである。これをどう考えるかなのであるが、私は狂言の担い手が僧侶もしくは僧体だったからではないかと考えているが別項としたい。

いずれにしても、畔翁の台本は、古台本や千之丞たちが演じられたものと比べると肩すかしを食う感じである。換骨奪胎というか品よく仕上がっている。文章的にも意味の通りによくところが随分とある。女の素性が後家であることがあまいであるし、古台本と違って女は最初から迷惑がっている。太郎冠者は最初狐か狸かすのではないかと思っっている等々が指摘できる。なぜ品よい作品にしようとしたかは能楽界復帰を望んでいた畔翁の思いを考慮に入れてみると面白いのではないかと思っ

ている。
後半は、《柿山伏》（この曲については田口和夫氏が『狂言論考』（三弥井書店）で『今昔物語集』に天狗が仏に化けて柿木に現れる説話を早くから紹介している）や《盆山》（盆栽に盗人が隠れる話）と同工異曲である。

復曲するにあたって参考となったのは山口市のものである。

特に稲田秀雄氏からは種々ご教示いただいた。『山口鷺流狂言集成』（平成十三年・山口市教育委員会）所収の「中西本」（山口県立大学蔵）と『鷺流狂言手附本』（昭和四十七年・山口市公民館）の「河野本」で本文はほとんど変わるところはない。キーワードとなる頼も出てくる。但し「中西本」では「川をぞ」と表記していたので気になったが『日葡辞書』には「カワウン」

と発音していたので、それに従った。「河野本」の注記で、女は白足袋を履く記述があったので、稲田氏に伺うと、山口ではすべて女役は白足袋を履くそうである。「中西本」とは、中西治郎旧蔵本のことであるが、書写年代がすべて「昭和期」とされている。小林責氏の解説によれば、山口鷺流の元祖とされているのは春日庄作（明治三十年、八十二歳没）で十世鷺伝右衛門寛太郎に教わったということである。

以前、北川先生と山口鷺流の舞台を拝見し、ほかの曲ではあったが参考になるかと思ひビデオを当日の演者とも見直したのであるが、今更、大蔵流あるいは安東流といったらよいか変更はできないので、発音・アクセントはそのままとした。逆に山口からのものでも鷺流が本来どのような発音・アクセントで行なっていたかを復元するのは難しいようである。

四、カワウン説話

関大本《寝代り》が「保教本」や虎明本「萬集類」と比べると文章の整合性のないものと思われるかも知れない。私も最初はそうだった。しかし、ここに来て、この曲のキーワードは現代にあつて「カワウン」であることを見いだした。

カワウソは特にニホンカワウソは特別記念物であつて、インターネット情報によると一九七九年以来、四万十川以来、目撃例がなく絶滅したと考えられるものである。坊主が「カワウソ」と鳴いても客には笑えなくなった現代の状況になつてしまつたのである。畔翁も大正元年に矢田次郎へ伝授した台本では後半は省略して「盆山のごとく」と書いている。すなわち鯛の鳴きまねをすることになつてゐる。「閑大本」では変更したのである。「日本語源大辞典」(小学館)によれば、鰻は「カワウソ」ともいい、川に住む恐ろしいものとも、尾を振つて化かすから嘘の語源だとも書かれてゐる。「虎明本」の《鱸包丁》にも「おそ」と出てくることばである。近代になつてからは正岡子規の「鰻祭書屋」という書齋号を思い出す。鰻が獲物を広げ散らすのを本にたとえているものであつた。興味深いのは一条兼良の『歌林良材抄』の説である。『万葉集』をあげて「おそはかはうそといふ獸なり。鰻の字也。此獸はじめはたはぶる、様にて、後にはくひあふ物なれば、それを田主にたとへていへる也」とあるのだが、実は鰻そのものではない。現在の解釈でたとえば小学館版によると一二六番と一二七番の相聞歌・あそび歌で、大伴田主(女)に言い寄ろうとした石川女郎が結局袖にされ「みやびをと 我は聞けるを宿貸さず 我を帰せり おそ

のみやびを」と歌つてゐる。いずれにしても『歌林良材抄』だから、兼良の時代には和歌のみやびなことばともなつていたのである。なお、『閑吟集』にも「うその皮うつほ」と歌われている。さらに興味深いのは、これを踏まえて「ひとりね」(日本古典文学大系『近世随想集』)に「鰻といふけだものは、夫婦のまじはりをはじめはする様にたはむれて、後には喰ひあふもの也とかや」とある。中村幸彦先生たちの注によると両歌は『宗祇抄』『夫木和歌抄』等にも見えるという。カワウソは、ほかにも年を取ると河童になるとか、鮎や鰻が變じたものとか言われている。カワウソにかかわる本は何種類か出てゐるのであるが、そのほとんどが動物学的なものであつて、寡聞にして文学・説話上の話はまとめられていないようである。あるいは河童説話に紛れ込んでゐるのかも知れないが、そこまでは調べきれない。

このように身近だつたカワウソだったが、純国産のニホンカワウソは今や見つかつてはいない。これは自然界からの警鐘なのかも知れない。私は、この日のために海遊館を訪れてみた。入り口から入つてすぐのところ、東南アジアに住むカワウソがたくさん飼われている。色は、購入したぬいぐるみよりももう少し茶色っぽかった。きれいな水の中で飼われていて、集団で

大変すばしこく行動する。化けると考えられたのも納得できる。時には、まさにお互いかみつきあっているが、これは遊んでいるのである。

狂言では、鳴かないことになっているが、耳を澄ますと「チューチュー」と鳴いていると私には聞こえた。

台本上で今一度確認すると「鷺畔翁型付本」（大正元年）ではまだ頼の発想はなかった。「文化小杉本」か「鷺流狂言型附遺形書」を見て頼に変更したと思われる。ちなみに狂言のほかの曲では《鱸包丁》に「片身さこふて頼が食べてござる」（虎明本、但し「おそ」と記す）が出てくるくらいである。

おわりに

関大本鷺畔翁の台本をきっかけとして、私は次のような畔翁の一生を思い描いている。青年期、鷺健次郎の養子となり、安泰したかのように見えたが、明治維新は、一旦、畔翁の生活をどん底に落とした。しかし、ほとぼしる才能を駆使し、吾妻能狂言に参加し、歌舞伎の座付き作者にまでなり、多くの名優を育てた。一方、鷺流宗家の仁右衛門家と伝右衛門家の廃絶は、畔翁の目前で起こった。それでも畔翁は意気軒昂であった。鷺

流の復活を目指して家元と自ら名乗った。しかし、台本まで書き与え期待していた養子の矢田次郎は、あえなくなくなり、畔翁にも既に命の余力は残っていないかった。このような筋を描けるのではあるまいか。

【台本翻刻】

【凡例】

一、句読点は任意に付した。

一、原文に則してママ記号も付したが、意味の通りやすいように一部（ ）で補ったところもある。

【翻刻】

十八 寝代

女 童ハ此家の主じにて候。先、太郎冠者を呼出し、申（し）

附る事が御座る。やいゝ、太郎冠者〜。

太郎 是あ。御前に。

女 其方を呼出すハ別の事でもない。此中、童が寝屋へ何者とも知らぬ出家が枕元へ来て、童をおびやかす程に、今夜ハそなた、童に代り闇に居て寝代つてハ呉まいか。

太郎 夫ハ何とも心得がたない事マヤで御座るが、去り乍、御意なれば是非に及びませぬ。寝代つて見ませう。

女 夫ハ近頃過分な。必ず〜何者であらふともあやまち致す

な。来たらバ如何やうにも 捕らへて仕やうがあるといふて、重ねて来ぬやうに言ふくめて帰せ。頼むぞ。

太郎 畏て御座る。

女 やい、此衣を被き、童に成り代(り)、寝て居てくれい。

やうすハ翌(朝)聞ふぞ。

太郎 御氣遣い成されまらずな。明日やうすを御物語り申(し)ませう。

頼むぞ。

太郎 ハア。イヤ、是ハ狐狸杯が化て来るも知れぬ事じや。

御主より預つて居るお太刀を持って寝代て居りませう。

シテ 是ハ此隣に住居致す出家で御座る。愚僧が旦那に少とよつた事が御座つて、度々文を遣いて御座れば、則、今宵参るやうにとの返事が御座つたに依て、漸々時分もよい。そろりく々と参らふと存る。楠々嬉しやの。不斗心を掛けて、成りもせず、やめられもせず致せば、死しての迷ひに成ります。首尾整ふも処が則、佛じや。イヤ何かと申す内に是じや。誰そ人のあるまひものもない。先、案内を申そふ。物申。案内もう。いや、表にハ誰もないよ。お齋を非持に参る内證の居間へ向けて参らふ。何とやら胸がだく附て、是ハ行かる、ものでハないぞ。エイ、さればこそ是に御座るよ。今宵のお

情けハ忝ふ存ずるぞ。待遠ふに思召ませう。是ハ窮屈な形りに御座る。其被をとらせられい。イヤと仰せられ(て)も夫ハ窮屈な。見る目も笑止な。平にとらせられいといへば。

太郎 がつきめ。やる事でハないぞ。

シテ 是々あふない。怪我をさすなく。

太郎 やあら己れハ憎いやつの。やうもく化けて来(た)な。

シテ 化けたとハ。おのれこそ化けたれ。怪我をさすなく。

太郎 某が化けたとハ憎いやつの。只一討ちにするぞ。

シテ やれ、あふない。命を助けてくれい。

太郎 命を助けまいとハ存ずれども、去り乍、ちと鬨て遊バふと

存る。イヤ今迄坊主のやうに見へたが、よくく見れば鳥じや。

シテ 是ハいかな事。鳥しやと申。

太郎 鳥も鳥。黒々とした鳥じや。

シテ 是ハ迷惑な事で御座る。

鳥なれば羽起きをして啼くものじやが。羽起きをして啼かすバ、たつた一討にするぞ。羽起きをして啼かぬかく。

シテ 是ハ鳥の真似を致さずハ成まひ。コカア。

太郎 是ハ面白ひ事かな。また鬨りませう。今迄鳥のやうに見へたが、よくく見れば狐じや。是ハく。狐もく。古狐の

こつちやうじや。よふ化て来たな。去り乍、命ハ助けふ程に、
くわいと啼け〜。啼ずハ一討にするぞ。

シテ 是ハいかな事。又、狐の真似を致さすハなるまい。くわい
〜。

太郎 笑 得こらへぬ。面白い事じや。また罫りませう。いや
〜 狐じやと思（ふ）たが、よく〜見れば獺じや。扱も
〜 大きな川獺かな。此やうな劫を経たハ色々化て人をた
ふらかすと申すが尤じや。おのれ、たつた一討にしてくれう
ずれども、命ハ助る程に、啼て聞かせい。

シテ 是ハにが〜しひ事を申す。川獺の啼くハ如何やうになく
事じや。

太郎 さあ〜啼け。啼ずハ一討にするぞ。さあ啼け〜。

シテ 扱も〜是ハ何とせうぞ。終に聞た事が御座らぬ。

太郎 さあ、啼ぬか〜。

シテ 是ハ迷惑な。何と啼ふぞ。

太郎 さあ、啼け〜。

シテ 川獺〜。

太郎 やい、おのれ。川獺と啼事があるものか。とちへ逃る。捕

へてくれい。

シテ 真平ゆるいてくれい〜。

（太郎）やるまいぞ〜。

《寝代り》は平成十九年十一月三日に山口驚流狂言保存会によ
り「春日庄作没後110年記念発表会」として山口教育会館ホール
で演じられた。

本稿は日本学術振興会の平成十九年度科学研究費の一部の助
成を得た。又、六麓会で報告したものである。

（せきや としひこ／本学教授）